

2005年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量										
	漁獲	産地	輸入	輸出	消費地			消費支出	在庫	加工	
					生	冷	塩	生(千)		塩干	缶詰
16	204	181.3	0.60	20.9	41.7	10.8	8.0	2,267	50.9	23.4	8.34
17	236	198.6	0.62	14.3	45.2	8.2	7.5	2,447	44.5	23.2	
%	116	109	104	68.4	108	76	95	108	87	99	0

年	産地	価 格					全サンマ			
		消 費 地	輸 入	輸 出	水 揚	価 格	消費支出	生(円)		
		生	冷	塩						
16	107	367	215	412	153	80	205.0	112	1,550	
17	64	295	231	437	175	75	229.7	65	1,547	
%	60	80	107	106	114	94	112	58	100	

資源と漁獲量

サンマの資源量は、1990年代前半と比較して資源水準が低下していると推測されるが、過去20年間の漁獲量の比較において、2002～2004年の漁獲量が高水準であることから、資源量水準は高位であると判断された。2005年においては、資源量（生物量）は大きい（362万トン）、これは、体重の重い2004年級群の資源量が多いためであり、2006年の主漁獲対象となる2005年級群の豊度は非常に低いため、資源動向は減少となると考えられている。

17年の漁獲量は前年を上回る約23.6万トンであった。

また、本年はTAC枠増加の関係もあって全漁期を通じて漁獲は増加し、8月に入ってから一昨年以上の魚価急落もあり、休漁措置が講じられたのを始め、その後も積荷制限も含め漁期終了まで漁獲の平準化のための休漁措置が恒常的に講じられた。

本年は前年より2日早く7月8日から流し刺網、同15日には5トン未満船の棒受網、24日には10トン未満の棒受網の操業が開始された。そして棒受網の20トン未満船が8月7日、同40トン未満船が8月9日、同40トン以上大型船が8月18日の解禁となった。

本年のスタート時（7月）の漁は近年では低かった2004年の1,647トンをやや上回る1,906トンの水揚げであった。

その後8月中旬以降にやや好漁となり、8月下旬に以降は昨年を大きく上回って推移した。特に盛漁期の9月に入ってから好漁が持続し水揚げ制限、積荷制限や休漁措置等も講じられ、漁獲枠や燃油代の高騰等の外的条件も重なり、実質的には11月19日をもって終漁となった。

本年の初期漁場は昨年同様釧路南東沖合で始まる展開で、8月に入ってから道東から択捉沖合に形成された。

9月の中旬に入ってから、漁場が北上し色丹島南方沖合にも広がり親潮第二分枝に沿って南方に拡大した。10月に入ってから上旬に三陸沿岸、下旬には常磐沿岸にも漁場が形成された。11月には道東沖合漁場が消滅し三陸南部、常磐から鹿島灘に主漁場が形成された。中旬以降は三陸南部漁場と鹿島灘沿岸で漁場形成がみられ好漁の内に終漁となった。なお、本年のオホーツクは、本年は出漁船がなく、昨年(408トン)を下回った。

魚体長は、8月の中旬に中型、大型であった以外は、漁期全般を通じて大型(29cm)主体の組成で通算では大型93%（59%）、中型7%（41%）、小型0%（0%）であった。体重は、125g以

上のものが大半を占めた。

魚価は、初漁期の7月こそ高値スタートであったが、大型船が出漁した8月中旬後半以降2桁台に急落した。しかも、その後も、各種措置等も講じられたが、魚価の回復はみられず、結果として64円で前年(107円)をかなり下回り、極めて安値であった一昨年の67円をも下回った。

こうした安値の背景には全漁期を通じて漁獲物の大型魚への偏りがあり、生食需要が10万トンといわれている中でこれを大きく越えた結果を反映したとみられており、片口イワシ選別機の是非も取りざたされた。

在庫量

本年も極めて高水準の前年には及ばなかったが比較的高い5.8万トンの越年在庫から始まった。それでも前年に比べると各月とも少なく新漁前の6,7月においては前年を約1万トンも少ない水準であった。そして例年在庫が最も少なくなる7,8月には前年より約5~8千トン以上も少ない水準の在庫(2001,2002年に比べると多い)となった。しかし船が出揃った8月以降、漁の好転もあり、9月末以降在庫は昨年並み若しくはそれ以上となり、その結果越年在庫も6.6万トンと前年(5.8万トン)を大幅に上回った。

平均在庫量は、前半の少なかった在庫を反映し4.5万トンで前年(5.1万トン)を下回ったが、近年でも多い水準となった。

消費地入荷量と価格

17年の消費地入荷量(10大都市)は、5.3万トン(生4.5万トン、冷0.8万トン)と前年以上に生主体の入荷となり前年(5.3万トン、生4.2万トン、冷1.1万トン)並みとなった。

本年は、好漁と大型化を反映して例年以上に下半期(8~10月期)の入荷が多く、近年では最も多い年間の入荷となった。

本年は産地での魚体が大きく、前年同様40尾、45尾サイズ主体であった。

また、本年の塩干物の入荷は0.8万トンで引続き前年(0.8万トン)並みであったが、本年も大きな変化はなかった。

本年も価格のピークは7月にみられ、8月に入って一昨年以上の急落場面もみられ、その後は各月とも前年を下回る推移であった。

平均価格は生295円(前年367円)、冷231円(前年215円)、塩437円(前年412円)で、生鮮は産地価格同様安値傾向を示したが、冷凍、塩干は2004年物の高値原料も多く前年をやや上回ったのが特徴。

また消費支出(1世帯当たり)をみると、数量で前年を上回り、金額では単価安を反映し前年並みであった。

輸出入

本年の輸入は、619トンでほぼ前年(595トン)並みであった。

これは近年安定した国内生産を背景に在庫が潤沢であったことが唯一最大の要因である。

輸出はH4年をピークに近年減少傾向が続いているが、本年は1.4万トンと前年(2.1万トン)をかなり下回った。

価格は、輸入190円(前年153円)、輸出75円(前年80円)であった。

本年の輸出は、中国が最も多く約3分の1の4438トンで首位の座を奪回し、続いてフィリピン、次にトリニダード Tobago、米国、サモアで、昨年1万トン近かった韓国は少なかった。